

一月の法話抄録

「本尊について」

釈尼花伝 担当

1月の末近くに父方のおばがなくなりました。

親せきのなかでも大変お世話になった方だったことのほかに、「生縁生起」をもって語れば、当方と同じ真宗大谷派東京教区のお寺を菩提寺とするお宅に嫁がれたので、自然と重きを置いて、考察させていただきました。

お見舞いの折には、生花と手づくりのお念珠を差し上げ、少しだけ阿彌陀様のお話をさせていただきました。

立派なお仏壇はあるのですが、「この世の中で一番強くご守護してくれるのは不動明王かと思っていました」と。また、「身近な人を誘っては霊能師のところへ通っては、それがよくあたるので、信心のなかった父までが、縁あつた寺のほかに神社にも欠かさずお参りに行くようになりました」との娘の話でした。そこで釈尊のお話と親鸞聖人のお話を少しさせていただき、今いただいている浄土真宗の教えが、いかに素晴らしいのかを短時間で語らせていただいて「そんなの

……私の主人も浄土真宗なの……」と、やっと軌道修正になりました。

最新のお見舞いで、当寺のご本尊の阿彌陀如来像の光り輝く写真を渡して差し上げました。すると小学生の孫が「この前、おじいさんからもらった写真はどつなの?」と尋ねてきました。みると地藏菩薩像でした。一向専念無量寿仏を思い出し、「阿彌陀如来、ただひとつでいいのだよ」と病室にて手短かに答えさせてもらいました。

南無阿彌陀佛

このことから、せめて三寶寺に縁があつた人は、日頃から「ご本尊は何か」をしつかりとわかっていて

しんらんさまかるた

りくの

たびより

ふねのたび



龍樹菩薩は、旅をするのに二つの方法があると示されました。一は陸を自分の力で歩いていく方法、他は仏さまの船に乗せてもらって、安心して目的地までいく方法です。親鸞さまは人間の力には限りがあるので、仏さま

欲しいと思ひ、今日の法題とさせていただきました。

真宗大谷派のご本尊は、示してありますように阿彌陀如来です。この如来の説を唯信鈔文意よりいただきます。

「佛について二種の法身申す。一には法性法身と申す。二には方便法身と申す。法性法身と申すは色もなく形もありません。然れば心もおよばず、語もたえたり。この一如より形をあらはして『方便法身』と申す。その御相に「法蔵比丘」となりのたまひて不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり。この誓願のなかに光明無量の本願・寿命無量の弘誓を本としてあらはれたま

の船におまかせしましうといわれました。

うれしいところを

おつたに つくる

親鸞さまは晩年



(八十三歳頃)にかけて、四百数十首にものぼる「和讃」をお作りになりました。そこには、くめども尽きないよるこびがあふれ、老いてなおいのちの炎を燃やし、真実のみ教えに生きぬかれた聖人のお姿をうかがい知ることがで

へる御形を世親菩薩は「尽十方無礙光如来」と名けたてまつりたまへり。この如来すなはち誓願の業因にむくいたまひて「報身如来」と申すなり。即ち「阿彌陀如来」と申すなり。「報」といふはたねにむくいたる故なり。この報身より心化等の無量無数の身をあらはして、微塵世界に無礙の智慧光を放たしめたまふ。故に「尽十方無礙光佛」と申す。

光の御形にて色もまします形もまします。即ち法性法身に同じくして、無明の闇をはらひ悪業にさへられず、この故に「無礙光」と申すなり。無礙は有情の悪業煩惱にさへられずとなり。然れば阿彌陀佛は光明なり。光明は智慧の形なりと知るべし。」

合掌

きるのです。

くじゅうで

おじょうど

しんらんさま

親鸞さまは、弘

長二年(一一二六



二)冬下旬の候より、病に臥され、ついに九十年の生涯を閉じて遷化されました。真実の自己を厳しく見つめ、苦悩の中に、なお明るく力強く生き抜かれた聖人の教えは、八百年後の今日、人々の心に生き続けています。

心に如来を思うとき